

Book Hunting ブックハンティング 2014

日系ミクロネシア人の波瀾万丈 南太平洋の剛腕投手 近藤節夫著

本書は、湘南の潮風と南方のジャングルのスコールから生まれたような作品だ。戦前の漫画・島田啓三『冒険ダン吉』はヤシの木の上から、ねずみカリ公にヤシノ実をなげおとしたのは覚えているが、トラック諸島（当時日本の信託統治）の大酋長だったとは。

今は昔明治のなかごろ土佐の森小弁といふ快男児が自由民権運動の夢破れ、トラック島にわたり、酋長の娘と結ばれた。年移り年替わり、神奈川県藤沢の相沢庄太郎という事業家がここに渡り、大酋長の娘と結婚、本編の主人公スムがうまれた。十二歳で父のふるさと藤沢にもどったところ、大酋長の孫だから、臂力すぐれ、ハワイ出身の若林忠志監督の目にとまり毎日オリオンズに入団するも三回登板しただけで終わった。高橋オリオンズへ。そこに登場したのが、湘南高校で甲子園、慶應義塾大学で

神宮と華麗な守備をうたわれた佐々木伸也、しかし球団経営の荒波に、高橋オリオンズ、ユニオンズ、最後はトンボとスムも転々。二年後南十字星の元のふるさと水島島にもどった。

そこにスムの仕事が待っていた。

トラック群島は太平洋戦争中の日米両軍の激戦地だった。たまたま今年8月にも、

ク！一ヶ月後スムは死んだ。

NHK、日本テレビがペリリュウ島を特集したが、守備隊長中川海軍大佐は、島民を避難させ自らは自決する。硫黄島の悲劇の南洋諸島版である。その傷癒えず、登場するのがここにまたまた湘南高校、慶應義塾大学ラグビー部、旅行会社所属の川手といふ第二の登場人物が遺骨収集事業に携わることとなつた。これが難事業で、厚生省の

機のアメリカ人パイロットは遺骨は機内に

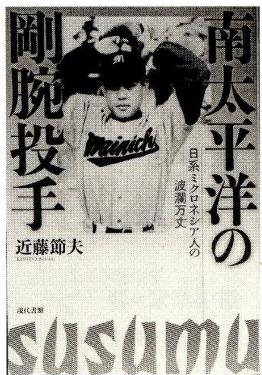
持ち込めないという。遺族は片時も放せない。川手は一手をあみだす。
島民側にも批判はつよい。自分たちも同じ戦火をあげたのに、日本政府の対応はにぶい、経済的援助もままならぬ。

このとき力をふるうのが、大酋長を嗣いでもいたスムであった。

ここにスムのたっての願いを叶えるのが、「プロ野球ニュース」で人気者となっていた佐々木伸也である。大毎のながれを汲む千葉ロッテの公式戦・始球式にスムを招いた。バッター川崎宗則、ストライク！一ヶ月後スムは死んだ。

遺骨収集事業の現地のわだかまりの渦中にあつて解決に手を伸ばしてくれたのが、森小弁の孫、ミクロネシア大統領エマニユエル・モリであった。そしてまた現役総理・森喜朗である。喜朗は小弁の縁ではない。ところがあら不思議や、父茂樹は敗戦間近満州からトラック島に転身、連合軍に収監されたのであった。

これで冒険ダン吉とその後継者の話は一さまざまの規制がある。遺族には遺族の深い思いもこまる。こんな軋轢もある。搭乗機のアメリカ人パイロットは遺骨は機内に



B6判／240頁
1600円／現代書館

価したうえで、こんなことを忠告していた。「プロなら毒もいるが」というのだ。もしこの書でそれをもとめるなら、日本の南進と植民地化であろうか。スヌムの中学卒業の記録の不明なことだろうか。それより相沢庄太郎もスヌムも妹も日本の戸籍謄本のうえでは、未だ生きている方がミステリーであろう。

さらに筆を進めれば、一度はドイツの信託統治、ついで日本、太平洋戦争後はアメリカ、やつとミクロネシア連邦となるなど大国の植民政策に翻弄される住民の心情、具体的には、日本の遺骨収集活動に現地の島民への配慮の不足のあたりであろう。

「チューク（トラック島）人はチューク人の主権国家として独立すべきであると考え、その目的のために、スヌムはミクロネシア連邦政府と

ロウして、若き日の平和運動の片鱗を観かせる。このあたり、「植民地文化研究会」（西田勝会長）の学会誌を覗見しても中島敦の南洋庁国語編集書記の仕事も含めて、これらのテーマであろうか。筆者もじつはいまゾルゲ事件を再発掘しているが、尾崎秀実を勧誘したアメリカ共産党日本人党員がペリリュウ島で毒殺されたことを知り驚愕しているところ。

さらにせっかくの「ブックハンティング」という「出版ニュース」の看板コラムを与えられたので、現今出版の可能性について。

すこしひろげてこういう時代に出版はいかに可能化について、何度も恐縮だが前記林はいま、自費出版の裏表について大胆な小説を朝日新聞で連載中である。

ただ時代は変わっても、自分史の執筆希望者は、ともすれば読者や編集者を忘れて自分の思いにこだわりやすい。

評者の関わる日本ペンクラブの入会基準についてよくおたずねいただくが、何もない。ましてや思想信条は問わない。あるとすれば単純な内規がある。それは出版社（商業出版？一般書店に並ぶ出版社？）から本を二冊出していることである。藤村が決めたか、川端かはしらない、それがなぜ基準になると問われても困るが（だから内規だ）、それは編集者の目を通じたことを意味するからだと心得ている。なぜそれが信用できるか。みもふたもなくいえば、それは彼らも飯の種がかかっているからである。

小中陽太郎（評論家）・評